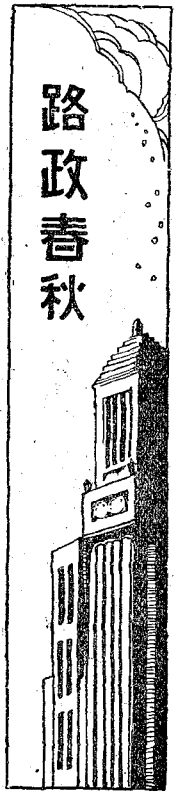

關門隧道の工作に心臟の高鳴るは誰ぞ

北支臨時政府建設總署土木技監として興亞大陸の建設に活躍する、前內務省下關土木出張所長三浦七郎氏が事務打合せの歸途十一日午前九時二十五分下關着、古巢の出張所に入つて小憩ののち掘鑿を急ぐ國道關門海底トンネル工事下關側掘鑿現場を視察、かつては總指揮官として采配を振つたトンネル工事の素晴らしい進行ぶりを感慨深げに眺めながら、海河を貫く天津海底トンネル案、北支の道路計畫、黃河改修などをつぎのごとく語り『北支治安の回復、戰後經營にはまづ道路建設が先決で土木豫算として明年度三千萬圓を要求してゐるので通過次第新設改修に努めたい、暴虐な支那軍によつて決潰された黃河の補修は着々進行中で、一部ではこれを機會に本流を變更するといふやう話もあるやうであるが、いまのところそんな計畫はなく差し當り缺潰箇所補修工事を行ふことになつてゐる。京漢清浦、正太線に沿ふ產業道路は是非とも必要で、十四年中にはやりたいと思つてゐる。新設するとすれば幅員十三米乃至二十五米くらゐの立派なものを作りたい。海河によつて二分された天津市街を聯絡するため橋梁案と海底トンネル案があるが、橋梁架設は通航船舶との關係上難點があり、僕としてはトンネルを掘鑿したいと思つてゐる。河幅はおよそ四五百米、もちろん鐵道車道、人道を設けるもので、出來れば支那最初の河底トンネルだ、現在の北京市をパリと同じやうに觀光都市として殘し西方四粁くらゐのところに新しい北京市を建設しようといふ計畫案はいづれ具體化し、近い將來には新城壁で圍まれた新首都が完成するだらう』と心臟の高鳴を感ぜられた姿は記者の目にしみ込んだ。

我輩は道路である

我輩は道路である。數年前までは僅か九尺の幅しかない砂利道であつた。やがて街が繁華になると共に、我輩も四間幅に昇格し、且つアスファルトで綺麗に舗裝しても

注意

本欄は讀者諸氏の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻擊に渡らざる限奇想天外的の寄稿を望む、一文は四百字位にて取捨は編輯子に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

らつた。我輩はいさゝか得意なものがあつた。所が人間といふ奴はわが儘なものだ。夏我輩が少々暑さにうだると直ぐべたつくと云ふし、冬雪が降つたり氷が張つたりすると、滑つて歩けないと云ふ。しかも埃も立たない今日この頃、我輩の膚の上にわざ〳〵水を撒いて氷を張らせる不注意者がゐるからあきれざるを得ない。迷惑至極だ。我輩の脇腹のところにある○○といふ家では、夏いくら我輩が暑がつてゐやうが水一滴かけてくれなかつたのに、近頃になつてやたらに水を浴せかけるのである。我輩の膚には厚い氷が張りつめられる。寒くてやり切れない。畜生どうしてくれようと考へると、我輩は無上に腹が立つて來る。そして何處にかこの忿懣を吐き出さずにはゐられなくなる。今朝など十三人すつころがしてやつた。娘は、羞恥の情に耐へず思はず落涙した。勤人は辨當箱を三間も先にふつとばした。鼻唄でお菓子を買ひに來た子供は、いやといふ程後頭部を打ちつけて、暫くは泣き聲も立てなかつた。可哀想なことをしたと思はぬこともないが、むかつ腹に先立つ後悔はなし、寧ろ誰が道ならぬことをさせたかと憾みたい位サ。人間に人情があるやうに、道路にも道情といふものがあるよ。何？　ドウジヤウがあるなら罪のないものには同情したらどうかつて？ジョ冗談ぢやないよ。おれを責める前に、この嚴寒に水を撒くやうな不埒な人間を徹底的に取締つてもらひたいね。

とは東京朝日紙に寄せたる結城氏の『道路の辯』と題する一文である。人間もチと我儘をつゝしんで呉れよと要求するのは寄稿者一人ではないのである。

街路選定の研究は新題目か

厚生省では國民體位向上の保健國策として、全國主要都市に綠地帶を設定するの計畫を講ずることとなつたと傳へらる。果して然るか然らば先づ街路樹の選定から研究すべきである。即ち輩路樹は氣候、風土、都市美、成長の遲速、落葉の情態、根張り等の點の多角的檢討を要するは言を俟たない所である。現今アカシヤ、ハシドリ、スズカケ、櫻、柳、銀杏、橡などの如きが栽植されて居るが、いよいよ厚生省の計畫が進めらるゝこととなれば一段と樹種の各地方に適種なるものを選定する上の研究が必然の事なのである。敢て當局の注意を促がすと某道路關係者の通信があつた。

氣短では駄目

二十年間も支那に居り日本よりも支那を知つて居るとの嘱がある、大谷光瑞氏の大陸縱横談の一節に『支那人と提携するには支那の國民性を克く理解することが必要だ日本人は非常にせつかちで、又せつかちだからこそ短歳月にあれだけの大事業を成し遂げたのだ。これからはせつかちではいけない、日本人は何事をするにも碁盤の目のやうにきつちり物指で計つて線を引き、そ

れから目の通に碁石を並べなければ承知しないが、支那人は夫が大嫌だ、碁盤目なんかどうでも石が並んであれば良いぢやないかといふんだよ、餘りこせ〳〵しないでじつくりとやるだね』『治水工事をやることだ、蔣介石が揚子江の堤をちよつと切つた丈けであれほどの騒ぎになるんだが、開發百年の計からいつても、どうしても治水をやらねばいかん、これ丈でも二千萬近くの支那民衆が救はれることになる』とある。さすがに光瑞氏である。對支政策としての東亞新秩序の建設を策する者は此言に耳を傾けることが緊要だ。

あるかなきかの珍聞奇譚（23）

○鎌倉時代の經筒の掘出し　新潟縣中頸城郡吉川村大字竹直地主小田政三氏　昨年秋一見石燒とも思はるゝ瓶を畑中から掘り出したが、此程高田師範學校齋藤教諭の鑑定を求めた處、今より七百年前鎌倉時代の經筒と鑑定されたが、此の經筒は藤原道長が八百年前談山神知に献納して以來社會に愛用されたものと云ふが一方當時錄部（六部）と云ふ宗教家が全國を股にかけ修業（巡業）した時經文を書いて此の瓶に埋めたものと傳へられてゐるが、小田さん方では得難い掘り出し物として秘藏してゐる。此の土器は一見石燒に見えセメント細工の如き色を有し、指先で仕上げた跡ばかりの不整形のものである。

○昔の宿屋札　最近古典の復活が多角度に新しい流行となつてゐるとき、五十三次宿場時代に發行した宿屋札を紙饌饉と勞力不足時代に一石二鳥案として採用、趣味家を喜ばすことになつた。愛知縣蒲郡西寶土俗保存協會ではこのほど同町の舊家足立陸男氏方で同家の先代足立大和氏が京都吉田殿に參向の際、投宿した時入手したものと見られる旗亭茂智屋惣左衞門方の宿屋札を發見したとのこと。

巴藤句屑

裾川に屑菜流るゝ邊春淺し
山高し一橋長し雪解川
曉天の峯赤か赤かと雪解川
生活のつかれ顏なり芝を燒く
逆光の鐵路長〳〵と燒野原
日三竿障子に梅の影動く
宮の梅いたつらに高き鳥居哉
藻離れをためろう鮒や春淺し
行き行きて唯一路なり梅の村
秘園荒れて百梅の一枝春淺し
宮の杜老梅うたゝ名高かり
坑道の深か〳〵と春淺し